

映像化ストラテジーにより類義語の正用文から想起される 「映像」の特徴

—日本語教育経験者の例文分析過程からわかること—

坂口和寛（信州大学人文学部）

河野俊之（横浜国立大学教育人間科学部）

要約

本研究は、正用文から直感的に想起した視覚的イメージを言語化する「映像化ストラテジー」に着目し、類義語の例文分析において言語化される映像の特徴を探った。日本語教育経験者3名の例文分析過程を発話思考法とプロトコル分析で観察した結果、調査協力者の映像化ストラテジー使用には例文が示すできごとや行為、発話を取り巻く場面的文脈が描写される傾向が窺える。さらに、背景的事象や心理的側面などの抽象的事象への言及も見られた。映像化ストラテジーによる例文分析では、例文の内容や言語要素を基盤として例文に示されていない関連事象が派生的かつ拡大的に想起され、シーンやストーリーとして映像が描写される。こうした例文分析は、表層的で情報の乏しい俯瞰的分析や、例文内容からの大きな乖離が起こる周辺的分析の問題を回避しうる。また、言語化された映像は類義語分析に資するような情報を多く含む一方、類義語の言語特徴に関しては暗示的な例文分析といえる。

キーワード

日本語分析 例文分析 正用文 映像化ストラテジー 類義語 日本語教育経験者

1. 研究の背景

外国人日本語学習者への日本語指導において、例文は指導の成否に影響する重要かつ不可欠な要素である。明示的指導では言語的説明を例証し、暗示的指導では文法規則などを推測する手がかりとなる。また指導にかぎらず、日本語分析においても例文利用は不可欠である。例文は言語形式の用法や文脈を端的に示すが、文法性の点から肯定的証拠である正用文と否定的証拠である非文に二分される。そして、文法性の異なる例文対は日本語の分析と指導の両面で重視される。柴田ほか（1979）は、『言えない（非文法的な）』文と『言える（文法的な）文』の比較を現代日本語の意味分析における成功の「カギ」としている。同様に山崎（2000）も、現代語の文法研究では「非文」が文法的な文としばしばペアで用いられ、非文の理由説明が用意されるとする。また姫野（1998）は、日本語学習者への類義表現指導で、非文の提示と理由説明により使い分けの理解を促すことが重要と指摘する。

しかし、例文それ自体が日本語の分析や指導の成功を保証するわけではなく、例文を分析することで有用な情報を得る必要がある。特に文法性の異なる例文対の場合は、非文分析が

相対的に重要視される傾向にある。非文については、抽象的な言語的問題と関連づけて検討し、文法性を損なう要因を明確に説明せねばならない。そしてその際には、広範な分析観点と高度な言語知識、メタ言語能力を要する。また非文は、分析だけでなく作成の手続きにも留意すべき点がある。仁田（2000）によれば、文法研究で利用する「座りの悪い文や逸脱性を持った文」は実例中に通例なく作例される。それは、「文法的でまっとうな文」に対し、共起する成分や形式を取り替えるという手続きによる。つまり、非文は偶発的作成ではなく、目的に応じ言語操作を駆使した意図的作成によって得られるものである。

以上のような非文の特質とそれに起因する非文分析の困難さを勘案すると、文法性に問題のない例文（以下、正用文）の重要性が増す。正用文は言語操作を伴う意図的作成を必ずしも要さず、日本語母語話者であれば自由に作り出せる。また、文の意味内容を直接的に把握できるため、正用文の分析には高度な言語知識やメタ言語能力を必要とせず、非文分析より手続きの特殊性や抽象性が低い。よって正用文は、言語分析に不慣れで、専門的で高度な日本語知識が不十分な日本語教師（以下、教師）や初学者にとって特に有用で、日本語の分析や指導での積極的な利用が望ましいといえる。

しかしながら、日本語の分析や指導では非文の重要性や有用性が強調され、正用文は非文の問題性を際立たせるための手だてとして対比的に用いられることが多い。非文については文の文法性を損なわせる要因を見出し詳述することが重要となり、そうした要因が日本語指導において日本語学習者に説明される。一方で、正用文の利用を教師が認識し実践していても、正用文を通じて得るべき、もしくは学習者に提示すべき情報は必ずしも明確ではない。鈴木ほか編（2008）は、日本語指導では言語的調整をした「言葉による説明」を極力抑え例文を援用するよう提案している。そして、言葉の説明を「裏づける役」を担う例文は説明との連携が必須で、裏付けに必要な前提や背景事情などを学習者にきちんと示すことが重要だとする。こうした指摘の一方、教科書や参考書では言語項目の説明と共に正用文が主に列挙されるが、例文に関する説明が常に用意されているわけではない。そのため例文の分析や解説は教師に任されることとなるが、言語的説明の裏付けとなるよう正用文について教師が明らかにすべき事からは非文に比して不明瞭といえる。さらに、正用文から有用情報を得るための分析手続きや分析過程で起こる問題も、十分には把握できていない状況にある。指導項目の分析や教材利用を行う教師にとって、正用文の分析は必要不可欠な作業である。したがって、正用文分析を支える手続きとその問題を精査し検討することは、日本語に関する教師の分析技術と指導技術の向上にとって重要な課題といえる。

2. 類義語分析における正用文分析を支える「映像化ストラテジー」

日本語の分析と指導に関して、類義語は重要な項目である。中道（2005）によれば、日本語学習者への語彙指導の目的は「語が理解でき、使えるようになる」ことであり、語の意味理解に関しては「類義語の意味差」に注意を要する。また倉持（1986）は、「類義語間の意味の異同を的確にとらえさせること」を語彙指導上の重要事項に挙げ、その成否が学習者の

日本語能力の伸長に大きく関わるとする。指導では、学習者が混乱せぬよう「類義表現の使い分け」をうまく処理することが教師の「腕の見せどころ」となる（姫野 1998）。以上のことから、指導に臨む教師は類義語の使い分けを整理する必要がある、その際には例文とその分析が不可欠となる。そうした例文分析の手續きとして、坂口（2009）は「映像化ストラテジー」を設定した。これは、日本語分析において正用文から直感的に思い浮かぶ映像やイメージを言語化し、正用文が表す事象や場面、人物の心情などを詳細かつ具体的に説明するという手續きである。以下は、類義形容動詞「ねっしん／しんけん」の分析で作った例文を、非教師の日本語母語話者が当該ストラテジーで分析した例である（坂口 2009）。

[例 1] 「女性との交際にはしんけんだ」：今いる、その相手に対してまじめに向き合っていて他を見ていない

[例 2] 「しんけん」に授業を受ける」：一つひとつの授業をすごくまじめに取り組んで、講義を聴いている様子

このように正用文からは、なんらかの事物や事がらを容易に思い浮かべることができる。文法的な分析を必要としないため、不慣れな分析者でも日本語分析に有用な情報が例文から得られると考え、正用文分析を支える基本的なストラテジーとして設定した。

3. 日本語教師養成コースの被養成者に見られたストラテジー使用の特徴と問題点

坂口（2013）は、民間日本語学校による「日本語教師養成コース」の被養成者が映像化ストラテジーで行った例文分析について、特徴と問題点を探った。コースの一科目で、受講者 15 名と補助者として参加した大学院生 1 名に本研究者（坂口）が類義語分析ストラテジーのトレーニングを行った。類義語分析での例文作成と例文分析、言語特徴分析を支えるストラテジーを指導し、そのなかで映像化ストラテジーを扱った。受講者は自身の作成した類義語対の例文を当該ストラテジーで分析し、グループで話し合った結果をワークシートに記述した。その記述から例文分析内容の特徴を探ったところ、言語化された例文映像は、類義語の意味特徴を示唆する情報を含むか否かに違いが見られた。例えば例 3 の「自分の欲求に従っている様子」という例文分析は、分析対象語「わがまま」の意味特徴を反映している。

[例 3] 例文「わがままなことを言ってはいけません」（受講者グループ A）

【例文分析】自分の欲望に従っている様子を叱られている

一方、俯瞰的な例文分析や周辺の例文分析がなされる場合、意味特徴を示唆する情報を含まない傾向が見られた。俯瞰的分析では、距離を置いた位置から眺める形で、例文が表すできごとが表層的かつ簡潔に説明される。例 4 の例文分析では例文を発話した話者の行為が表層的に述べられているが、類義語の意味特徴を示唆する情報が見られない。

[例 4] 例文「末っ子は長女に比べればわがままだと思ふよ」（受講者グループ B）

【例文分析】末っ子の性格を批評している

また、例文に示されていない周辺の事象を説明する例文分析は、映像の説明に飛躍が見られ、例文の直接的な内容と関わりが薄く、結果として類義語に関わる情報が含まれにくい。例

5 は、例文が表す情景に加え、その後の事態と話者の心情が述べられている。このうち後半部分は、例文の字義どおりの内容には示されていない話者の様子が言語化されている。

[例 5] 例文「風も吹かないのに、ドアが勝手にしまった」(受講者グループ E)

【例文分析】 パタン、あれ？ それが起こってから気づき、不思議に思う

4. 問題の所在と本研究の目的

映像化ストラテジーによる正用文分析では、類義語の言語特徴を示唆する映像が十分に言語化されるとはかぎらない。特に、俯瞰的分析による表層的説明では類義語の微細な意味内容が把握しにくく、また周辺的分析では言語化内容が例文の指示内容と大きく乖離し類義語との関係性も希薄となる。以上のような坂口 (2013) において指摘した問題は、受講者が自身の例文分析内容を持ち寄り話し合っまとめるというグループ作業の結果から把握できたものである。映像化ストラテジーでの例文分析の練習にグループ作業を用いた意図は、ストラテジーを用いた例文分析への取り組みやすさと、他者の分析を見てストラテジーの理解を深めることにあった。しかしそうした練習手続きのため、分析者個人の例文分析過程と、そこでのストラテジー使用の特徴や問題点が十分に把握できていないわけではない。さらに、グループ作業とワークシートへの記述を通じて集約や取舍選択がなされ、分析内容がストラテジー使用の実態を反映しているとはいいがたい。これらの問題点を補完するには、分析者個人が正用文から映像を想起し言語化する過程を観察する必要がある。

また、例文分析過程の観察からは、映像化ストラテジーが想起と言語化を促す映像の実相もつまびらかにできる。坂口 (2013) では、例文から映像を想起し言語化する手続きの面を中心に、映像化ストラテジーの問題点を探った。それに対し、分析者が正用文から何を思い浮かべどのように描写するかという側面に焦点化することで、被養成者への調査で明らかにしたストラテジー使用の特徴や問題点をより発展的にとらえられるだろう。さらに、日本語教育経験のない被養成者だけでなく日本語教育経験者の正用文分析にも目を向けることで、ストラテジー使用の実態をより正確かつ詳細に把握できるものと考えられる。以上の点は、正用文分析における映像化ストラテジーの効果的使用を検討するためにも取り組むべき課題といえる。

そこで本研究は、日本語教育経験を有する日本語母語話者が映像化ストラテジーを用いて行った正用文分析の過程を観察し、例文から想起し言語化される映像の特徴と問題点を探る。さらに、ストラテジーを用いた被養成者の正用文分析に見られた手続きの特徴をふまえて、日本語教育経験者のストラテジー使用の特徴を検討する。本研究の成果によって、日本語分析での正用文利用を支える映像化ストラテジーのあり方と有用性を示したい。

5. 研究方法

5.1 映像化ストラテジーに関するトレーニング内容と教材

坂口 (2013) の調査方法を基本的に踏襲して個別調査を行い、分析者個人の例文分析過

程とそこでの映像化ストラテジー使用を観察するためのプロトコルデータを収集した。具体的には、日本語教師養成コースで実施したストラテジートレーニングに若干の変更を加えた以下の手続きによって、調査を行った。

- ①【練習 1】例文作成：類義語対「わがまま／かって」の例文を 4 個ずつ作成
- ②【解説】映像化ストラテジーの特徴と具体例について説明
- ③【練習 2】例文分析：練習 1 の例文から 2 個ずつ選び映像化ストラテジーで分析

まず、日本語教育用の辞典などを参考に選定した類義語対について、文型や表現形式の重複を避けて例文を 4 個ずつ作成する（練習 1）。例文は練習 2 で用いるためのものだが、例文分析を意識させず自由な作成を求める。次いで、ストラテジーの解説を教材に沿って本研究者（坂口）が行う。教材は、Microsoft 社の PowerPoint で作成したスライドを 4 枚ずつ A4 紙 1 枚に載せて印刷したものとワークシートである。養成コースではスライド 14 枚で例文分析について扱ったが、本研究では映像化ストラテジーを扱う前半 6 枚のみ使用した（表 1）*¹。例文分析の基本事項を説明する導入部（1 から 3）と、映像化ストラテジーの特徴と使用例の解説（4 から 6）で構成される。このうちストラテジーの解説スライドを図に示す。解説後に、映像化ストラテジーで例文を分析する（練習 2）。練習 1 で得た類義語対の例文 8 個から、各語の特徴をよく示していると調査協力者自身が思う例文を 2 個ずつ選ぶ。そして各例文についてストラテジーにより想起し言語化した映像を、ワークシートに記述する。

表 1 映像化ストラテジーの基本的理解を目的とした教材スライドの内容

スライド 1～3	類義語分析での例文分析の必要性
スライド 4	例文分析ストラテジーの概要 ①例文の「映像化」 ②思い浮かぶイメージから言語特徴を考える
スライド 5	「映像化ストラテジー」で例文の内容を具体的に考える 例文から想起する映像・イメージ（内容・様子・もの・こと・置かれている状況・気持ちなど）を言語化する
スライド 6	「映像化ストラテジー」の手順とその具体例 例文「部屋のすみを掃除する」から想起される映像（絵）とその言語化例



図 映像化ストラテジーの特徴と使用例の理解を目的とした教材スライド（例）

分析者個人の例文分析過程を探るために、練習 2 は養成コース実施時のグループ作業から個人作業に変更し（表 2）、さらに発話思考法での例文分析を求めた。分析者は、例文分析の過程で思ったことや考えたことをすべて独り言のように口頭で述べつつ、例文から想起した映像をワークシートに記述していく。以上の作業を例文ごとに繰り返し、選定した四つの例文を連続して分析した。また、制限時間は設けず、調査協力者のペースで行われた。例文分析中の調査協力者の発話は録音し、それを文字化してプロトコルデータを作成した。

表 2 映像化ストラテジーの練習（練習 2）とその手続き

	分析者	練習 2-1（例文選択）	練習 2-2（例文選択）	練習 2-3（例文分析）
坂口 (2013)	受講者 3 名のグループ	各受講者がそれぞれ 4 個の例文を選択 「かって」例文×2 「わがまま」例文×2	グループで計 12 個の例文から 2 個ずつ選択 「かって」例文×2 「わがまま」例文×2	4 個の例文それぞれから想起した映像を言語化 ※個人で行った後、グループで結果をまとめる
本研究	調査協力者	「かって」例文×2 「わがまま」例文×2	※この行程なし	4 個の各例文について想起した映像を言語化

5.2 調査協力者

調査協力者は外国人学習者に対する日本語教育の経験を有する日本語母語話者 3 名で、日本国内の大学において日本語教育学を専門に学ぶ大学院生である。調査実施時の日本語教育経験は以下のとおりで、全員が類義語分析の方法やストラテジーに関する指導を受けていなかった。調査は 2012 年 3 月に実施した。

[調査協力者 A] 40 歳代；日本語教育経験年数 11 年

[調査協力者 B] 30 歳代；日本語教育経験年数 12 年

[調査協力者 C] 40 歳代；日本語教育経験年数 7 年

6. 調査協力者の例文分析過程と映像化ストラテジー使用に見られる傾向と特徴

調査で得たプロトコルデータから、調査協力者の正用文分析過程に見られる特徴的な映像化ストラテジー使用を探る。またその際、被養成者のストラテジー使用に関して坂口（2013）で指摘した俯瞰的分析および周的分析と、それらに起因する問題もふまえて例文分析の特徴を探る。

本節で例示する調査協力者のプロトコルは、基本的に、該当する例文を分析している発話すべてである。ただし、例文分析の開始直後に例文が読み上げられている場合は、その部分のみ省略した。それぞれのプロトコルには記号や数字を付しているが、「//」で示した数字は 2 秒以上続く沈黙とその秒数を、「?」は上昇イントネーションを伴っていることを、「***」は文字化不能の発話部分をそれぞれ表す。さらに、類義語対の意味特徴を明らかにする手がかりになりうると考えられる例文分析部分には、下線を付している^{※2}。

6.1 俯瞰的な映像描写を補足する例文分析

被養成者と同様に、調査協力者の映像化ストラテジー使用にも俯瞰的分析が見られる。しかし表層的描写や簡潔な説明に終始せず、それを基に補足的な分析を行い映像の描写を具

体化させている。例えば、調査協力者 C は例文「勝手なふるまいは許さない」について話者が注意や指示を行って「相手の言動を制限」しているとし、続けて、注意を受けた相手の「自由がない」状況に言及している。最後に言及された「規制」や「ルール」は例文が示す事からの背後にある事象で、言動が制限され自由がない状況の根拠や理由を示している。

[例 6] んー/3/これは 3 番^{※3}と反対に、相手に対して、注意指示している、こと、で、/3/相手の/4/言動を制限する、/11/自由がない、反対だな/20/3 と 4 は、反対、の立場。勝手は、だから/5/責任、と/5/勝手/2/自由の/3/なんか/3/勝手、が自由で/4/あそっか言葉の説明はしなくてもいいんだね、イメージね。勝手なふるまいは許さない/3/許されない/4/ん/2/外側からの、規制や/7/ルール/2/が/2/ある (調査協力者 C)

以上の例文分析では、例文が表す発話を通じてなされた行為が俯瞰的に述べられている。しかしそれにとどまらず、聞き手の置かれた状況とその背後にある決まりごとといった、話者の行為を取り巻く文脈が言語化されている。俯瞰的な情景を基に例文に示されていない事からが補足され、映像の説明がより具体的になっている。

調査協力者 A による例文「私に断りもなく自分で勝手に決めてしまった」の分析では、「相談がなかった」というできごとと、本来なら相談があつてよかったという「前提」が、話者の視点で描写されている。これは、例文が直接的に示す他者の行為を“何か起きたのか”というできごととしてとらえ、俯瞰的に描写したものである。また、「前提」はできごとの背後にあり、例文が示す行為に先行する事象である。分析後半では、俯瞰的分析に関する具体例として「大きい買い物」を挙げている。そして、その状況における“あるべき相談がない”という事態を述べることで、分析内容を具体化させている。なお、分析最後にある「自分一人で」したことや判断したことへの言及は、例文の述部に起因していると考えられ、文構造と言語要素に基づき例文全体から映像化されていることを示す。

[例 7] えーっとですね、この場合は/3/本来なら相談があつていいという前提があつて/4/その相談がなかったということですね/2/本来ならそう/2/あまちがえた/4/相談が/3/あつて、しかるべき/2/状態/3/その/2/そういう前提があると/6/でそれがなかったと/4/そうですね、勝手に決めてしまった/6/うん/7/例えば家を買うとか/2/そういう大きい買い物をするとき、パートナーに相談するべきなのにそれがなかった/2/り/4/家を買う/5/などの、重要事項/5/事項、に、相談がなかったと/4/に自分一人であつてことかな？ 勝手に自分で勝手に決めてしまった、そうですね、自分一人でか、うん、自分一人でやってしまったと、一人で、判断してしまつた/5/状態

(調査協力者 A)

6.2 例文内容を取り巻く文脈の言語化

調査協力者の例文分析過程においては、例文が示すできごとや行為を取り巻く状況が多く言語化される。例えば、「団体行動をするときはわがままな行動は許されません」という例文の分析で、調査協力者 A は「一番いい例」として団体のツアー旅行を挙げた。これは、例文が発話された際の状況を端的に示す具体的事象である。そして、全てプランが組まれた旅行だという前提に言及し、その状況下で自分の望む行き先ばかり主張し他人の迷惑を考えないという聞き手の「状態」を詳述している。さらに聞き手の様子については、「やりたい放題」であることと、自分の都合しか考えない状態に言及している。

[例 8] えー一番いい例では、えーと、団体のツアーです/2/ツアー旅行/4/当然、全部えーとプランが組まれてるわけですよ？/2/でーそのプ、組まれてるプランに乗らないであたしは勝手にあそこ行きたいだとかここ行きたいだとかって言って、他人の迷惑を考えてない状態/3/他人の/2/迷惑を/2/考えていない状態、考えて、いない、状態/5/えーとですよ、あと何だろう、ツアー旅行/3/自分のやりたい放題ということですよ、自分の/4/自分の都合しか考えていない/6/ていない、状態（調査協力者 A）

以上の分析ではまず、禁止を表す例文には明示されていない場面的文脈が端的に示されている。そして団体ツアー旅行という具体的状況をふまえてさらに映像を想起し、発話（例文）を引き起こした問題行為が詳述されている。なお以上の分析は、「団体行動」と「わがままな行動」という例文中の一部の要素を基にしており、例文全体が示す禁止という意味については述べられていない。

また調査協力者 B は、例文「最近子どもがわがままに困っている」についてまず保育園の「先生」と母親の会話であることに言及し、さらにその会話場面を「懇談会」として会の様子や話題を述べている。そして、この場面的文脈をふまえて母親の相談内容を具体化し、そのなかで手を焼いている子どもの様子を描写している。ここでも、例文が発話された際の場面的文脈が端的に言語化されており、それを基に状況が詳細に言語化されている。

[例 9] お母さんと/2/保育園の先生の話/3/の、先生/3/で、えーと、懇談会で/5/最近の子どもの様子を聞いている/2/でたくさん、お母さん/5/いて、で、えーと最近の子どもの様子についての話で、お母さんから/4/最近子どもが、わがままに困っている、わがまま、わがまま/3/うーん、言うことを聞かない/5/聞かない、手を焼く/5/勝手に/5/で/3/でわがままに困っている、で、それに対して/5/先生からは/5/わがままに、困っている、わがまま/2/で子どものわがままについて/8/どう、対処して、対処、どう、対処（調査協力者 B）

以上の二例は端的に述べた場面的文脈をさらに具体化しているが、調査協力者 B による例文「同僚のパソコンを勝手に使う」の分析では、全体を通して場面的文脈が詳述されている。まず、行為主が置かれた状況として、急用でメールを確認したいがパソコンが壊れているという問題を説明し、さらに同僚が不在であることも述べている。こうした場面的文脈に加え、同僚がかねてからパソコン使用を許可していた事実も言及されている。

[例 10] 勝手に、急いでいる、急い/2/急ぎの用事/6/急ぎの用事/2/んー/3/パソコン/3/急ぎの用事を、んー？ 何て言う/2/パソコンを/2/あ、自分のパソコンが壊れている/7/自分のパソコンが壊れている/2/でも/6/んー/2/メールだけチェックしたい/13/で/2/えーと仲のいい同僚/5/同僚/3/に/2/ちょっと借りる/10/勝手に使う/3/仲のいい同僚/2/に、ちょっと借りる/2/んー/3/同僚のパソコン/4/んー/2/急ぎの用事/5/同僚がそばにいない/14/そばにいない、うん/5/でもいつでも使っているよって言う/8/んー/9/で勝手に使う/9/なので、ん/4/ん、ちょっと/3/勝手に/2/使わ、せて/2/もらう（調査協力者 B）

例文が示す行為の説明はわずかで、例文分析の中心は、例文に表されていない場面的文脈にある。具体的には、パソコンを借りる行為主が置かれた状況と、借用を決めた経緯や背景にある。前者は行為遂行時点での状況であり、後者は当該行為が許容される根拠となる過去の出来事である。

調査協力者は、場面的文脈のほかに言語的文脈も言語化している。例えば調査協力者 B

は、例文「彼女はわがままだけかわいい」に対し「友達同士の話」と発話時の状況をまず端的に述べている。そして、互いの「彼女」を話題とした会話の中で、友達から質問されたことを描写している。この質問は、例文が示す発話に先行する言語的文脈である。Bは以上の文脈説明をふまえて「彼女」の人物像を具体化し、「自分勝手」な振る舞いや、自身の好みを優先する様子を述べている。

[例 11] わがまま、友達同士の話¹⁰/友達同士の話で、お互いの彼女の³/の彼女について話して⁵/話して、彼女、はどんな人か⁷/どんな人か、聞かれて⁹/彼女はわがままだけかわいい、わがまま、彼女が勝手に、自分勝手に⁶好きなことを言う⁶好きなたべ、ん、んー、に行きたいところに行く⁹/たいところに行く³/んー、自分の好みを優先⁶/んー³優先³/んー、優先、いつも振り回される⁷振り回されるけれど、かわいい (調査協力者 B)

Bが言語化した場面的文脈や言語的文脈は例文自体には示されていないが、例文の直接的内容や言語要素に基づいていると考えられる。なお、分析最後に見られる「振り回されるけれど、かわいい」という説明は、例文分析が例文の内容と構造に沿っていることを示唆している。

6.3 例文話者の心理的側面の言語化

映像化ストラテジーで言語化される俯瞰的情景や場面的文脈は、例文に関する事象を傍観者の視点から外面的に描いたもので、動画や静止画のように視覚化できる。一方で調査協力者の例文分析では、抽象的で視覚化できない心理的側面も言語化されている。例えば調査協力者 C は例文「何をしようと私の勝手だ」から、例文が表す発話に至った経緯とともに、発話時の話者の心情や意図を言語化している。具体的には、自身の行動の結果責任を負うし自由だという話者の「気持ち」を述べている。また、俯瞰的分析も行い、発話を通じた話者の「反応」や「反発」という行為を表層的に描写している。その中では、他者から注意や指示が発話直前にあったという、例文に示されていない文脈にも言及している。

[例 12] イメージって、んーと⁵/何かをして、その結果、が⁵/悪くても⁴/んー²/自分が責任を負う¹⁶/自由、自由だ⁶という気持ち⁸勝手だ、何をしようと私の勝手だ²/誰かに³/何か注意、指示されて⁷/の、反応⁹/反発 (調査協力者 C)

また、調査協力者 B は例文「母は勝手に引き出しを開けた」について、場面的文脈を中心に言語化しつつ話者の心理描写も行っている。Bはまず、例文が示す母親の行為に話者が気づく過程を説明している。具体的には、帰宅した際に目にした部屋の様子に触れ、掃除されたことと引き出し内の変化に気づいた様子を描写している。そして、「日記を見られたかも」という話者の推測と、母親を非難する心情を述べている。以上の分析では、話者になりきり、目にしたことや抱いた気持ちが主観的視点で言語化されている。傍観者視点の外部からの描写とは異なり、例文が表す世界に当事者として入り込む形の映像化である。

[例 13] 学校から帰って⁹/学校から帰ると、うん、部屋がきれい¹⁰/掃除をした¹⁰/母が掃除をした²/んー²引き出しの中の⁵/の、物の位置が、変わっている⁷/物の位置⁶/日記⁴に見られたかも⁷/お母さんひどい⁸という気持ち (調査協力者 B)

6.4 例文内容に関わる具体的事例の提示

調査協力者の例文分析には、例文内容を具現化した事物の言語化が見られる。調査協力者

Cは、「わがままばかり言っていると友達がいなくなる」という例文から、周りが見えず、自分を大切にする人物を挙げている。そしてその人物像について、誰からも好かれず友達がいないと具体化した。わがままな行為に起因する事態を例文は表すが、例文分析ではそうした事態を招く人物とその特徴が言語化されている。また、性格的特徴から友人の有無へと説明が及ぶ人物描写は、わがままな行為と友達がいらない事態との因果関係をふまえたものであり、分析が例文の内容と構造に基づいていることを示唆する。

[例 14] とー/2/難しいなあ/5/イメージ/4/んー/4/何だろう/7/まわりが、見えない/7/んー/4/自分が大切、な人/9/だから/8/誰もまわりに/2/来ない/18/だから、誰、からも好かれなくなって/4/友達は/2/いない人 (調査協力者 C)

調査協力者 A は、例文「母親はわがままな子どもを叱りました」についてデパートでひっくり返って泣く子どもをまず想起し、その振る舞いの理由にも触れている。そして、この子どもの描写をふまえて、母親の諫める様子とその際の発話を詳しく述べている。この分析では、デパートという場面的文脈とともに「叱る」対象である「子ども」が具体例として言語化され、それを基に母親の言動がさらに詳述されている。例 14 とは異なり、具体例の描写にとどまることなく、例文の内容と構成要素に沿った描写となっている。分析の最後には「母親が子どもを諫めているシーン」とする俯瞰的分析も見られ、複数の手続きがとられた例文分析であることがわかる。

[例 15] えー、と、場面はデパートの中でひっくり返ってる子ども、デパート、の、中で、ひっくり返って泣いている/3/泣いている、子どものイメージですね/3/で当然何か買ってほしいわけです。何かを買ってほしいとせがんでいるわけですね/3/買ってほしいと、せがんで、います。で、それを困った母親が/2/えーと、諫める、困ってないかもしれませんがね、諫めています。そういうわがママを言うんじゃないかと/3/そういうイメージですね/2/母親が、子どもを、諫めている/2/シーン (調査協力者 A)

6.5 例文の文構造や言語要素に沿った映像化

例 14 と 15 について指摘したように、調査協力者の映像化ストラテジーによる例文分析では、例文全体の構造や言語要素に基づいて映像が想起され言語化される傾向がある。例えば調査協力者 C は、例文「わがままな人は苦手だから」について「感情のままに言動を行う人」とまず言語化し、その人の言動に見られる周囲への気遣いのなさを述べている。そして話者の立場から、当該人物が迷惑な存在であり気分を悪くさせるとしている。分析の最後には、以上の人物像とそこから抱く否定的感情を理由に「わがままな人」が好きではないことが言語化されている。

[例 16] 3番とおんなじー***/3/んー/7/難しいな/7/自分の、感情、の、ままだ/6/言動を行う人/10/えーとー、まわりの人の/3/気遣いはない/4/から/2/迷惑/11/だから一緒にいると/2/気分が悪い/8/だから/2/好きじゃない (調査協力者 C)

例文自体は話者の苦手意識を表すが、例文分析ではその背後にある、わがままな人の言動と話者の心情が述べられている。最初に言語化された人物像は例文冒頭の「わがままな人」に対応し、話者が抱く否定的な評価と感情の説明は例文の述部に対応している。そして、背景にある事象をふまえ、「わがままな人」と苦手意識の因果関係を明確化している。以上の

分析は、例文の全体的な構成や言語要素を射程にとらえてなされたものといえる。

7. 考察

本研究で取り上げた映像化戦略は、正用文から想起される「映像」として、動画や静止画のような視覚的イメージを中心的に想定している。そうした戦略を用いた調査協力者の例文分析過程では、グループでの話し合いを経て記述された被養成者の例文分析に比べ、多くの事ながら例文から想起され詳細に言語化されていた。特に、視覚的イメージとしてとらえやすい場面的文脈に焦点化する傾向が窺え、調査協力者は例文が示すできごとや行為、発話が起こった際の状況を具体的に描写していた。こうした場面的文脈の言語化は、俯瞰的分析に起因する問題の回避にもつながりうる。内容が表層的で簡潔になりやすい俯瞰的分析は類義語の意味特徴に関わる情報が得られない可能性をはらむが、俯瞰的分析を行っている調査協力者の分析過程には特段の問題が生じていない。具体的には、例文映像の表層的描写にとどまることなく、それを補完しうる場面的文脈が言語化されていた。その結果、被養成者への調査で見られたような簡潔で情報の乏しい例文分析ではなく、類義語の意味特徴に関わる情報を含む具体的な例文分析となっていた。場面的文脈の言語化は例文映像の描写を具体化し、俯瞰的分析の不十分さを補う可能性が指摘できる。

さらに、視覚化しやすい場面的文脈とは別に、視覚的にとらえにくい抽象的事象への言及も調査協力者の例文分析には見られた。具体的には、例文が示すできごとなどの背後にある事象や、話者の心理的側面の言語化である。映像化戦略は、例文に示される人物や話者などが抱く心情も、例文から想起される「映像」に含めて扱っている。調査協力者の例文分析に心理描写が見られたことについては、戦略に関する解説(5.1節および図)の影響が考えられる。また、場面的文脈の詳細な描写ともなつて背景説明や心理描写が促された可能性も指摘できる。

映像化戦略により言語化される場面的文脈や背景的事象、心理的側面は、例文が示す内容にとって補足的な情報であり、例文には直接的に示されていない事象や側面である。調査協力者の例文分析には他にも、例文に示されていない事ごととして、例文が示す内容を具現化した具体例が言語化されるケースがわずかながら見られた。以上のように例文にない事ごとが言語化される例文分析ではいずれも連想が働いており、被養成者の戦略使用に見られた周辺的分析と共通する。しかし、連想を通じた調査協力者の例文分析は、例文の直接的な内容からの大きな飛躍や乖離が必ずしも見られるわけではなく、例文内容や類義語との関係性が維持されている。こうした点で、周辺的分析に起因する問題が起こっていたとは言いがたい。

調査協力者の映像化戦略使用では、例文自体の内容や言語要素を基盤として、それらと密接に関わる事ごとが補足的に、そして拡大的に言語化されていく。つまり、例文それ自体が示す断片的な内容を幅広い視野でとらえ、関連する文脈情報を付加しながら、例文からの映像をシーンやストーリーとして鮮明に描写しようとする。こうした手続きのため、

例文に明示されていない事柄が描写されることとなるが、同時に例文内容と密接に関わる事柄が連想されることとなる。また具体例については、例文が示すできごとや行為に対して事物が言語化されているという点で例文内容からの飛躍が認められる。ただし、例文の直接的内容を顕著に、もしくは典型的に体现する事物の言語化であり、例文の内容をふまえたうえで映像化されたものといえる。以上のような手続きにより、連想を通じた映像化であっても例文内容から大きく飛躍することなく例文分析がなされていると考えられる。

調査協力者の例文分析過程からわかるように、映像化ストラテジーは例文の言語要素や構造を基としてそれらに関連する事象を派生的に、発展的に想起することを促す。一方で、例文そのものが字義どおりに示す直接的内容や言語機能については十分に説明されない傾向が窺える。坂口 (2013) は、映像化ストラテジーによって生じる俯瞰的分析や周的分析では分析対象語の言語特徴に関わる情報が得にくいことを指摘し、その対処法として例文の直接的内容を意識的に言語化することの必要性を挙げた。しかし、調査協力者の例文分析過程を見るかぎり、映像化ストラテジーでは例文の直接的内容が積極的に言語化されることがないようである。また、例文の直接的内容は、文の構成要素とその意味内容に基づいて直訳のように文意を説明することにもなる。こうした手続きは視覚的イメージの想起や言語化と性質が異なるため、映像化ストラテジーによる例文分析では例文の直接的内容が言語化されにくくなるものと考えられる。

調査協力者による例文分析の過程からは、映像化ストラテジーで言語化した例文映像が類義語分析にとって有用な手がかりとなりうるということがわかる。6 節で挙げた 11 例の例文分析にはいずれも、分析対象語である「かって／わがまま」の意味特徴を示唆する説明が見られるためである (例 6 から 16 の下線部分)。しかしながら、映像化ストラテジーは類義語の働きや言語特徴を明確化することを目標としておらず、類義語が担う意味内容などを際立たせる形での例文分析は求められていない。調査協力者の映像説明において分析対象である類義語の使用が多く見られることは、その証左であろう。つまり、類義語の言語特徴という点から見れば、映像化ストラテジーによる例文分析は暗示的分析といえる。したがって、言語化した例文映像から、例 6 から 16 の下線部分のような分析対象語との関連性が窺える部分を特定して抽出し、抽象的な言語特徴へと意識的にまとめあげるという作業が必要となる。こうした類義語の言語特徴を意識して際立たせる形での再分析は、類義語分析において映像化ストラテジーを効果的に用いるために不可欠な手続きであろう。

8. まとめと今後の課題

本研究は、類義語分析において正用文を効果的に利用するための「映像化ストラテジー」に着目し、例文分析過程で例文から想起し言語化された映像に焦点化して、ストラテジー使用の特徴を探った。日本語教育経験を有する調査協力者 3 名の例文分析には、例文の直接的内容に関わる詳細な場面的文脈を想起し言語化する傾向が窺える。また、俯瞰的分析や周的分析に起因する問題は見られず、類義語分析に資する情報を含む例文分析が映像化ス

トラジェーによりなされていた。一方で、分析者個人のトラジェー使用をつぶさに観察することを旨とした本研究は、実施した調査が小規模でデータが少ないものである。そのため、把握できた映像化トラジェー使用の特徴は、調査協力者の個人的な分析スタイルと切り離してとらえることが困難な面もある。よって、多くの例文分析例をさらに収集し、個人的な分析スタイルもふまえつつトラジェー使用の特徴や問題点を探る必要がある。

映像化トラジェーの要諦は、正用文からの直感的で自由な映像想起にある。このことは手続き的な困難さを抑え、効果的な例文分析にもつながると考える。調査協力者の例文分析はいずれも類義語の弁別的な意味特徴につながる情報を含んでおり、当該トラジェーの有用性を示唆する。一方、そうした映像は例文から無意識的に想起されており、類義語の言語特徴とその分析を意識したうえでのものではない。よって、例文分析は類義語の言語特徴を暗示するものであり、類義語の言語特徴に関わる情報を含むか否かという点についても不確かさが残る。さらに、映像化トラジェーでは例文を個別に分析するため、類義語対やその例文同士を対比させて分析するわけではない。しかし、類義語分析においては、例文からの映像を類義語間で比較検討する手続きや、言語特徴と関連付けたうえでの映像の精査も重要となる。こうした意識的で補足的な分析は、類義語に関わる部分を映像からの的確に見出し、言語特徴を明らかにできる手がかりを確実に得るための手続きとなるだろう。

また、今回の調査では、類義語を用いた複合語の例文とその分析が見られた。調査協力者 A は例文「勝手気ままに一人旅を楽しんだ」を作成し、例文分析では「他人に相談する必要がなく」、「そのときの気分で」、「状態に縛られていない」といった説明をした。ここには複合語「勝手気まま」の言語特徴が反映している。複合語は構成要素の意味が単純に加算されるわけではなく、映像化トラジェーによる例文分析では注意を要する。このほか、今回の調査では見られなかったが、動画や静止画のような形での映像化が困難な例文もありうる。本研究においては、以上のような、データ収集を重ねて綿密に検討すべき問題が残っている。今後はそれらに対処することで、日本語分析技術の熟達度が低い分析者でも容易に、効果的に例文分析ができるよう、映像化トラジェーの記述を進める必要がある。

注

1. 後半部分のスライド 8 枚は練習 2 の実施後に提示し、トラジェー使用上の問題とその対処法、例文分析をふまえた言語特徴分析を説明するものである。本調査は映像化トラジェーを用いて最初に行われる正用文分析を対象とするため、当該スライド 8 枚を使用しての説明は行わなかった。
2. 類義語対の意味特徴に関わる例文分析内容の判別は本研究者と現職日本語教師 1 名により行われ、合致した部分にのみ下線を付した。またその際には、以下の類義語辞典を参考とした。
 - ・『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』（田忠魁ほか編、研究社、1998 年）
 - ・『使い方の分かる類語例解辞典 [新装版]』（小学館辞典編集部編、小学館、2003 年）
 - ・『ちがいがわかる類語使い分け辞典』（松井栄一編、小学館、2008 年）

3. この例文分析に見られる番号は、調査協力者 C がこれより先に分析した例文「何をしようと私の勝手だ」を指している（例 12）。調査では例文と例文分析内容がワークシートに書き込まれるが、その例文記述欄に番号がふられている。調査協力者はこの番号を用い、例文分析過程で例文を指し示している。同様の例文番号による指示は、例 16 のプロトコルにも見られる。

付記

本研究は、第 38 回日本語教育方法研究会での発表内容を基に、データを再分析したものです。調査にご協力くださった皆様と、研究会において貴重なご助言をくださった皆様に、心より御礼申し上げます。また、査読者の方からは、本論文の改善につながる貴重なご指摘をいただきました。重ねて感謝申し上げます。なお本研究の一部は、平成 23～25 年度日本学術振興会科学研究費助成事業 [基盤 C ; 課題番号 23520624 ; 研究代表者・坂口和寛]、および平成 26 年度日本学術振興会科学研究費助成事業 [基盤 C ; 課題番号 26370601 ; 研究代表者・坂口和寛] による助成を受けて行われました。

参考文献

- 姫野昌子 (1998) 「教える現場で直面すること」 姫野昌子・小林幸江・金子比呂子・小宮千鶴子・村田年『ここからはじまる日本語教育』 ひつじ書房
- 倉持保男 (1986) 「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』 Vol.5、No.9 明治書院
- 中道知子 (2005) 「語彙指導」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』 大修館書店
- 仁田義雄 (2000) 「用例を利用する一文法研究の場合」『日本語学』 Vol.19、No.5 明治書院
- 坂口和寛 (2009) 「日本語教師の日本語分析技術を養成するストラテジートレーニング—独習型教材の開発」 小林ミナ・日比谷潤子編『日本語教育の過去・現在・未来 第 5 巻 文法』 凡人社
- 坂口和寛・河野俊之 (2010) 「日本語分析ストラテジーの独習型教材において疑似的インターアクションを生み出すインストラクション」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.17、No.1 日本語教育方法研究会
- 坂口和寛・河野俊之 (2012) 「類義語分析ストラテジーのトレーニングに見られた正用例文分析行動の特徴」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.19、No.1 日本語教育方法研究会
- 坂口和寛 (2013) 「日本語母語話者の類義語分析における正用例文分析の特徴と問題点—『映像化ストラテジー』による例文分析について」『信州大学国際交流センター電子紀要』 論文番号 6
- 柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進・浅野百合子 (1979) 『ことばの意味 2—辞書に書いてないこと』 平凡社
- 鈴木智美ほか編 (2008) 『ことばの説明・文例集 この言葉、外国人にどう説明する?』 アスク出版
- 山崎誠 (2000) 「文法研究と用例—事例と作成の割合」『日本語学』 Vol.19、No.5 明治書院